

# 午後9時10分

## 泉源公園

泉源公園は観客で溢れていた。気温は氷点下8度。大きな雪の粒が強風に舞う。

観客たちは分厚いコートを身にまとい、主催者から振る舞われた汁粉と甘酒で寒さをしのいでいた。

白組が勝てば湯量が増え、紅組が勝てば湯の温度が上がる。

誰もが、登別温泉の行く末をこの目で見届けるべく、その時を待っていた。

「うおおおおおおおおおっ！」

力強い雄たけびとともに、戦士たちが戦場になだれ込む。その先頭には白い鉢巻きをして、右手にたいまつを握りしめる古本さんの姿があった。

冷気に震える者は誰ひとりいない。

肉体という熱いよろいを身にまとった戦士たちは、戦いの火蓋が切られるのを待ち焦がれ、その瞳を輝かせている。

騎手を務める男女4人が、誓いの言葉を高らかに告げる。

たける戦士たちが、天まで届くような大きな咆哮を上げた。



紅組の騎手が、5メートルはあるたいまつを、天に向かって突き立てる。瞬間、桶に湯をくみ待ち構えていた戦士たちが、全身の力を込めてお湯を天へと放り投げた。戦場がたちまち、温泉の飛沫と湯気に包まれる。やがてたいまつのはげが消え、いよいよ最後の戦いが始まる。

